

天軍

2006(平成18)年9月23日鑑賞(ホクテンザ1)

☆☆☆



監督・脚本=ミン・ジュンギ/出演=キム・スンウ/パク・チュンフン/ファン・ジョンミン/コン・ヒョジン (エスピーオー配給/2005年韓国映画/106分)

第2章

発想の面白さで見せる

……タイムスリップするのは、『戦国自衛隊1549』では織田信長の時代1549年だったが、『天軍』では李舜臣の若き頃の時代1572年。何でも日本の上をいきたい韓国(?)では、タイムスリップする武器も完全武装の自衛隊の上をいく核弾頭……。そして、南北問題を抱える韓国では、タイムスリップする人的構成は『トンマッコルへようこそ』と同じく、対立する北朝鮮と韓国の兵士たち。こりゃ何か大事件が起こらないはずがない……。民衆を守り蛮族と闘うのか、それとも本来の世界に戻るのか、最終的にはそれがテーマだが、さて個々の兵士たちの決断は……? 奇抜なアイデアと大スペクタクル戦闘シーンを存分に楽しむことができるはず……。

6年越しの構想その1 『戦国自衛隊』と『戦国自衛隊1549』

『天軍』は2005年の韓国公開映画だが、その構想はミン・ジュンギ監督が1999年に思いついたアイデアに始まる。ミン・ジュンギ監督はこの『天軍』が長編映画初監督作品だが、2000年に初稿を書き上げ、2001年に映画化が決定された後、2004年までに改稿を重ねたとのこと。

そしてそのアイデアは、歴史書『朝鮮王朝実録』に記された、神兵が現れ敵を攻撃したという短い記述から出発しているとのこと。この「神兵」とは当時の朝廷が援軍と頼んでいた明の兵隊という説が有力だそうだが、そこに『戦国自衛隊』(79年)や『戦国自衛隊1549』(05年)のアイデアをプラスしてみれば、「神兵」はたちまち近代兵器で完全武装した兵士に早変わり……。すると、この「神兵」たちが果たすべき役割とは……?

6年越しの構想その2 李舜臣

歴史好きの日本人であれば、誰でも「李舜臣」の名前を知っているはず。言うまでもなく彼は、豊臣秀吉の朝鮮出兵によって起こった「文禄の役」（1592年）、「慶長の役」（1597年）で日本軍を撃退した人物で、朝鮮民族にとっては、救国の英雄。第2次世界大戦後、不幸にも南北に分断された朝鮮だが、韓国では歴史の研究が自由にされているため、とりわけこの李舜臣は有名で、釜山やソウルにはその銅像が建っている。

そこでミン・ジュンギ監督が、現代から過去へタイムスリップさせるなら、日本では『戦国自衛隊』における武田勢との戦いの時代や『戦国自衛隊1549』における織田信長の時代だが、韓国では李舜臣が活躍した時代と構想したのは当然。私はミン・ジュンギ監督の第1稿では、きっと李舜臣率いるわずか13隻の水軍が日本の333隻の大船団を撃破した1597年の「鳴梁沖での戦い」の場にタイムスリップさせたのでは、と推測。

しかし、第15稿まで推敲に推敲を重ねる中、タイムスリップする時代は、李舜臣が武科の試験に落第して失意のどん底にあり、コソ泥稼業に身をやつしている1572年に設定された。したがってこの映画のタイムスリップ物語は、救国の英雄、李舜臣の成長の物語ともダブることに……。

6年越しの構想その3 共同開発の核兵器

2006年7月5日に突如発生した北朝鮮からの長距離ミサイル7発の発射に続いて、現在、北朝鮮では核実験の危機が進行中……？ したがって、後見人役を自認する中国も、そんな北朝鮮にちょっと手を焼いているのが実情……？ しかし、盧武鉉大統領率いる韓国政府は近時ますます反米色を強め、反国家的活動をしたとして逮捕されていた多くの親北・革命活動家について、現在その反政府活動は「民主化運動」だったと解釈して次々と関係者に補償金を与えたり名誉回復の手を打っている。

このように南から北への接近は急激に進行中……？ 最近のそんな状況を見ると、南北共同による核兵器の開発とその完成もあながち空想の世界ではなく、

現実的な可能性も……？

そんなイメージでミン・ジュンギ監督が構想したのが、南北共同開発の核兵器「飛撃震天雷」。しかし、アメリカをはじめ中国も日本も、北朝鮮と韓国の共同開発によるそんな核兵器の保持を許すはずはなく、監視団立ち会いの下、せっかく開発した核兵器は引き渡さなければならないことに……。

2005年10月20日に下されたこの引渡し命令は、韓国と北朝鮮の最高司令官による決定だったが……。

6年越しの構想と奇しくも一致した『トンマッコルへようこそ』

韓国で800万人の観客を動員して大ヒットした『トンマッコルへようこそ』（05年）が日本でも10月28日から公開されるが、これは南北分断の悲劇を味わっている韓国ならではの心温まる涙と感動の物語。

ミン・ジュンギ監督が『天軍』の構想を練り脚本の改稿を重ねていた6年の間に、この『トンマッコルへようこそ』は公開されていないが、完成品を比べてみると、奇しくもそこにはある一致点が……。

それは当初は「アメリカの傀儡！」VS「アカ野郎」と互いに罵り合っているながらも、生死をかけた行動を共にしていく中、次第に信頼と友情が芽生えてくる南北両軍兵士の姿だ。やはりこれが、今を生きる韓国人のアイデンティティなんだとあらためてビックリ……。

女性科学者はあの……？

この映画の紅一点は、ICBM（大陸間弾道ミサイル）「飛撃震天雷」を開発した女性物理学者のキム・スヨン（コン・ヒョジン）。このミサイルは、その所在をアメリカから探知することが不可能なように設計されているから、今や韓国と北朝鮮はアメリカを先制攻撃できる世界で唯一の国になったというスグレもの……。そんな自負心があったから、それをアメリカに引き渡せという命令は科学者としても悔しくてたまらなかつたはず。しかし、南北の最高司令官の決定とあればそれも仕方なし。やっとならそう割り切った彼女だったが……。

そんなスヨンを拉致して、飛撃震天雷の核弾頭と共に研究所から脱出したのは

カン・ミンギル少佐（キム・スンウ）率いる北朝鮮の部隊。他方、南北連合軍から飛撃震天雷の奪回と逃走兵全員の射殺を命じられたのが、パク・チョンウ少佐（ファン・ジョンミン）率いる部隊。そんな2つの部隊の銃撃戦に心ならずも巻き込まれてしまうスヨンを演ずるのは、『品行ゼロ』（02年）で女番長役を演じたコン・ヒョジン。彼女は1980年生まれだから、こんな世界最高水準の核兵器を開発する科学者にはちょっと不似合いな若さだが、コミカルな雰囲気を与えつつ全編にわたって重要な役割を。スペクタクルな戦闘シーンもいいが、彼女の水浴びシーンにも是非注目を……？

タイムスリップの原因は……？

「タイムスリップもの映画」は、それぞれどういう原因でタイムスリップするのかを説得力をもって観客に示さなければならない。この映画のそれは、433年周期で飛来している彗星が、時速37kmで朝鮮半島上空を通過してきたため。もっとも、この433年周期という設定は、それ自体に科学的意味があるわけではなく、逆算から割り出されたもの。つまり、28歳の李舜臣が武科別科の試験を受験し落第したのが1572年だから、2005年からこの1572年にタイムスリップするためには、433年間遡ることが必要というわけだ。

韓国軍兵士、北朝鮮軍兵士数名と共にスヨンが意識を回復したのは、『戦国自衛隊1549』と同じように、蛮族たちが民衆を襲っている真っ最中。本能的にカン少佐やパク少佐は銃を手にしたが、流れ矢に当たり犠牲になる兵士も……。とっさに、蛮族のリーダーに対して銃を発射したため、今まで見たことのない武器の登場にビックリした蛮族はいったんは退却したが……。

李舜臣の登場だが……

この映画のタイトル『天軍』は、天から神兵が降ってきたと思い込んだこんな村の人々が、彼らを「天軍」と呼んだため。彼らの目に天軍と見えたのは当然だが、所詮、生身の人間だから、突然ヘンな時代にタイムスリップしてきた兵士たちは大変。そんな弱みをもった人間たちからコソ泥のように銃などを奪ったのが、28歳の李舜臣（パク・チュンファン）だ。

李舜臣の登場後、しばらくはコミカルなドタバタ劇が展開されるが、そんな中、頭脳明晰な女性科学者スヨンの分析と、歴史に強い韓国の将校パク少佐の知識によって明らかになるのが、タイムスリップしてきた今は1572年であり、目の前にいるこの頼りなさそうなコソ泥こそ、後に豊臣秀吉の日本軍を打ち破る李舜臣將軍その人だということ。

もっとも、そんな歴史教育をきっちりを受けていない北朝鮮軍のカン少佐はそんな話には興味がなく、ひたすら共にタイムスリップしてきたはずの核弾頭を探すことに没頭。そんな韓国、北朝鮮双方の兵士たちの全く異質な行動ぶりは、『トンマッコルへようこそ』と同じようにきわめて興味深いもの……。

後半のテーマは2つ……

映画後半のテーマは2つ。その第1はスヨン博士の研究分野で、どうやったら現代に戻ることができるのかということ。そして第2は、蛮族たちの復讐からどうやって身を守るのかということ。第1の解答は意外に説得力のあるもので、私もなるほどと感心したものだから、是非注目を。他方第2のテーマは、李舜臣が民衆を守るために立ち上がり、兵士たちに協力を求めてきたから、自分たちの身を守るという問題からまさに天軍としての役割を果たすかどうかという問題に発展していった……。

しかし、そんな蛮族との決戦の日と本来の時代に戻るためにタイムスリップできる日が、折悪しく重なることに……。

そこで、試されるのが兵士たちの人間性。つまり、決起する民衆たちを見捨てて自分の時代に戻るのか、それとも無事に戻れる確率が5対5なら民衆のために命を捧げようとするのかということ。もっとも、ここで残留の決断をしやすいのは、戻ればどうせ処刑されるだけとわかっている北朝鮮のカン少佐たち。韓国映画らしい(?) 人生の選択が、ここで各人明確に……。

ここには、日本人特有の「あなたならどうする?」という様子見、日和見の世界は存在せず、自己責任にもとづく決断のみ!

戦闘シーンの迫力とその帰趨は……？

いよいよ今日は蛮族が攻めてくる日。それまでのコソ泥風霧囲気から一転して武将風になった李舜臣は、テキパキと戦いの戦法を指示するが、それは何とも理に適った優れたもの。これぞ、その25年後の1597年の「鳴梁沖の戦い」で日本軍に大勝した李舜臣將軍の戦法の原型だった。

その戦いにカン少佐はもとより、遂にパク少佐も参加。騎馬隊で突進してくる蛮族の刀や槍そして弓矢に対して、李舜臣の巧妙な戦術で対抗し、さらに南北兵士たちの近代兵器で応戦する戦闘シーンの迫力は、手に汗を握るもの。そして、その帰趨は……？ もちろん、李舜臣を死なせるわけにはいかないことが大前提だから……。

おまけのサービスは……？

蛮族との戦いは終わり、危機一髪のところまでタイムスリップしたスヨン博士と核弾頭は、無事現代に戻ってくる。これにて一件落着、ああ面白かったと思ったら、実はこの映画にはもう1つおまけのサービスがあった。それは、その後大きく成長した李舜臣の乗る船が日本軍船を迎え撃とうとしている「鳴梁沖の戦い」の戦いのシーン。

「死のうとする者は生き、生きようとする者は死ぬ」と部下を鼓舞して戦いの先頭に立つ李舜臣將軍の姿は、実に凛々しく立派なもの。しかし、ホントにこれからその戦いがスクリーン上で再現されるの、と半信半疑で思っていたら、結局おまけのサービスはここまで……。

「鳴梁沖の戦い」のスペクタクルシーンを撮るほどの経済的余裕がなかったのかもしれないが、このおまけのサービスはちょっと中途半端では……？

2006（平成18）年9月26日記